

Chairman's Correspondence

やせ我慢が無い社会は滅びる？

最近の日本の社会に起こっている憂うべき事件を見ていると、つくづく日本人は欲望のままに、やせ我慢がなくなってきたと思います。勿論私の自戒も含めて……

特に 30 数年前の「バブル現象」は、作家の司馬遼太郎氏が当時「このバブルの風潮は人間をだめにし、日本人を悪くし何十年もその後遺症で悩むだろう。」

というようなことを書かれていましたがその通りになりました。元来、額に汗して働くことを尊ばず、投機や、土地転がしで国民みんなが幸せになれるはずは無かったのでありますが、当時は浮かれて誰も耳を貸さなかったのです。

やせ我慢とは「自立」の精神であります。イギリスで生まれたスポーツはゴルフもラグビーもサッカーも、雨でも嵐でも、場合によっては雪でもやりますが、これなどは考えようによっては「やせ我慢」の 極致です

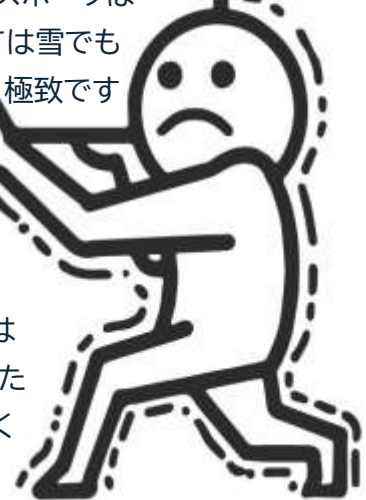
しかし、このジョンブル精神が生き生きと生きていたころは、大英帝国は世界の覇者でした。日本も、「武士は食わねど高楊枝」の武士道精神が生きていた明治頃までの社会は、世界の発達途上国では恐ろしく賄賂が少なく、実力主義(特に軍人や教員。でも軍人の起こした戦争には賛成できません)の社会でした。それゆえ有色人種でいち早く先進国となり、おかげで現在でもほとんど唯一ともいえる有色人種先進国であります(今、台湾、韓国、シンガポールが仲間入りを果しています)。

「自立」は「自己犠牲」も伴うものです。およそ人の社会は経済原理で動いているものですが(つまり損得、そろばん勘定で基本的に動いている)、中でも、ある人は社会や国家のため、あるいは広く人類のために志を持って働いている人がおります。いや、誰もが心に何パーセントか(人によっては何十パーセント、マザーテレサなどは 99 パーセントかもしれませんが)「社会のために」という心を持っていると言っても良いでしょう。

これからは「自己犠牲」の精神を持つ人が社会にどれだけいるかで、その国力が計られる時代だと思えます。ただし、その自己犠牲、奉仕の目標は、誰に強制されるものでなく個人の自由意志で決めるものであります。

そこが戦前の自己犠牲とは決定的に異なるべきでしょう。

ギリシャ文明も、ローマ帝国も人々の心から毅然とした誇りや、やせ我慢が無くなって安易な方へ安易な方へと流れ、社会が外部の敵ではなく内部から崩壊していった事実を忘れてはなりません。



Chairman's Correspondence

縦割りの遊びは社会的知性と感情的知性を育む

兄弟姉妹の少ない現代、縦割りの異年齢で子どもたちが群れて遊ぶ姿は見られなくなりました。小学校ですら休み時間には同年齢の子どもたちとしか遊びません。脳科学者の澤口俊之(北海道大学)先生は、この群れ遊びこそ、コミュニケーション能力を高め、社会性を育て、感情的知性(他人の感情を理解し、自分の感情をコントロールする力)を育てる最も大事な機会と述べておられます。

学童保育の現場はその意味でとても大事な教育の場です。年齢の高いものが下の者を気遣い、年齢が低い者がリーダーシップのモデルとなる上級生の立ち振る舞いを学び(時には仲間はずれにされるかも知れませんが)、いつかはあんなりたいと憧れ、一生懸命遊びについて行く。

今はリーダーが育ちにくい時代です。集団が希薄ですし、上の者の立ち振る舞いを見るチャンスがありません。学童の現場では、リーダーには

- ① チームの意思を取りまとめる力
- ② チームに対する思いやり
- ③ 秩序を保つための規則遵守制(ルールを守らせる力)
- ④ フェアネスの精神で裁く力(誰にも公平・公正さで接する)
- ⑤ メンバー(特に年少の者)を優先する利他的な心
- ⑥ チームの目標を掲げ、全体の利益を求める心

などが求められます。キャンプ、校外学習、体験活動、チーム対抗のイベント等を仕掛けて、その場を作っていきたいと思います。

秋は実りの充実期。これからも育脳学童で様々な脳を鍛えましょう。

